神戸学院法学第31巻第1号（2001年7月）

『青年ミヘルスと サンディカリズム（1904年）』

氏　家　伸　一

1）はじめに

イタリアの優れたミヘルス研究者，ピノ・フェッラーリスによれば1903年秋から翌年秋にかけての1年間は，青年ミヘルスがドイツ社会民主党（ＳＰＤ）の政治に「より直接，かつ責任をもってかかわった1年」であった。しかも，その活動はただドイツにとどまらず，イタリア社会党（ＰＳＩ）のボローニャ大会そして8月15日の第二インター・アムステルダム大会に及んでいた。これらの大会でミヘルスが意図したのはＳＰＤとＰＳＩの革命路線を第二インターに反映させることだった。(1)

それと同時に，ＳＰＤの内部批判とフランスの革命的サンディカリズムへの接近というテーマが浮上してくる。

ミヘルスは例の『底流』論文でも示されたように，自伝的文書を第三者の目で書くという手法を気に入っていた。『かわいそうなコンラート――労働する人民のためのカレンダー』に書いた「12月24日と5月1日――実際にあったメルヘン」(N. 81)(2) という小文がその最初のものであろう。この回顧的文章は，青年ミヘルスが社会主義に傾斜していったそのモチーフを具体的に描いている。少年時代のクリスマス・イヴの話と，結婚後に初めてメーデーと出会った話の二部よりなる。

裕福なブルジョアの家に生まれた少年ボニー（ミヘルス）は，しかし，

「最初の世界苦」を経験する。即ち，「旦那と召し使いたち」の階級分裂であり，少年ボニーはそれを「不道徳」と感じていた。「なぜ」との質問に親は答えてくれない。そして「世界に対する子供の反乱願望」が目覚め始めた，という。「親のすべての行動を＜不正＞，＜いかがわしい＞，＜醜悪＞と感じた」と青年ミヘルスは書いている。社会主義者ミヘルスの幼児体験であり，思想的原点というわけである。

老いた乳母は，すべては「神の思し召し」である，ただ天国は皆に「平等に」約束されている，として少年ミヘルスを慰めた。

クリスマスにはすべての子どもに平等にプレゼントが配られると信じていた少年ミヘルスだが，イヴの日，痛恨の体験をする。買い物に連れていかれたミヘルスに，別の貧相な少年が物乞いをした。平等のプレゼントの話をした少年ミヘルスにその「小さなプロレタリア」は嘲笑を浴びせるだけだった，「すべては君たち豊かな世界のことだ」，と。少年ミヘルスは絶望のあまり熱を出す始末だった。

長じてボニーはキリスト教信仰と，「資本主義の神通力と聖性への信仰」をすっかり失ったと書いている。

第二話はミヘルスが社会民主主義者になったいきさつを語っている。

新妻と森を散歩中，木々の青さのなかで，「人間の心に希望と喜びの覚醒」をもたらす光景に出くわした。それは広い草地でのメーデーの集会であった。そこでの演説に青年ミヘルスは圧倒されたという。「労働する大衆の権利」，「抑圧と隷従」，「解放と闘争，未来の役割と現在の忍耐」，「強固な団結」，「偉大なる，すべてを包み込む愛」，要するに「苦悩する人間」にかかわる一切のことが語られていた。二人の心は高揚していた。翌年のメーデーは二人も一緒に祝うことになる。

「12月24日への信仰は取り返しようもなく消え失せた。しかし，５月１日への信念とそれが追求するものは，深くそして永遠に二人の心に埋め込まれた。」

子どもの無邪気な正義感，欺瞞（キリスト教）告発そしてヒューマニ

ズムが読み取れよう。

ギーゼラ・リントナーと結婚したのが1900年だから，翌1901年には社会主義者となったことになる。

名著『イタリア社会主義運動の批判的歴史』でミヘルスはイタリア社会主義運動の出発点として，バクーニン，第一インター派と並んで，「排他的労働者党」をあげている。

そもそも「その発生時から今日まで，イタリアの労働運動は常にその指導者をブルジョア陣営から選んできた」。「イタリア社会主義史でほんの短い時期だが，プロレタリアートの潜在的プライドが＜ブルジョアの後見＞に反乱したことがある。」それが「職工党」Partito Operaio である。

N. 86 論文「1883年イタリアにおける純粋プロレタリアート運動」はミヘルスのこのテーマに関する恐らく最初の論文であろう。

この論文は，青年ミヘルスの問題意識の発展史を知るのうえで興味深いものである。というのも，この年末より，フランス・サンディカリズムとの交流が雑誌 Le Mouvement Socialiste への投稿というかたちで具体化してくるからである。(3) この論文は，1883年にミラノで誕生した労働者主義の党「労働者の子連盟」Lega dei Figli del Lavoro を紹介するものである。この組織は，前年に組織された職工党が標榜した原理を再興した組織であった。その本質は「ギルド的労働者主義であり，経済闘争に重点をおくが，政治面における社会主義的闘争を拒否するものであった」といわれている。(4)

Lega は，機関紙『ファッシオ・オペライオ』を発行した。そこでは，「もしイタリア労働者が自分で自分のことを考えなければ，解放されないだろう」という，フランスの労働者出身社会主義者ブノア・マロン（1841-1893）の言葉をモットーに掲げていた。

ミヘルスは党の綱領を「イタリアの党史にとって大きな意味がある」と評価している。そこでは，「我々は何者で，何を望むか」と自問し，「労

働者階級の解放は労働者自身によってのみなされる。歴史はこう教えている。我々自身のみがなしうることを他人に委ねること」は誤りである。この排他的労働者主義は，(ブルジョア) 政治家そのものへの反発に由来し，第一インターの思想を反映するものであった。

さらに，ミヘルスは，この綱領で要求された女性の平等，農民の地位向上，軍隊の解体を紹介し，特に第一の女性解放の要求は，イタリアの労働者の綱領で最初のものだと高く評価している。

しかし，ミヘルスによる好意的評価はここまでで，批判的評価もみておかねばならない。

そもそもこのように頭脳労働者やブルジョア転向者を排除した，肉体労働者のみの組織が生まれたのは何故か。ミヘルスは三つの背景的理由をあげて説明している。

まず，プロレタリアートの自己解放というマルクスの命題の誤解がある。ミヘルスによるとそれは，「第四身分の解放は，Deus ex machina や Rex ex machina の仕業ではないということ」を意味しているのであり，決して，元ブルジョアが戦うプロレタリアートの隊列に加わることを排除しない。

第二には，第一インターに対する批判がある。つまり，インター・イタリア支部を指導したブルジョア出身のラディカル・グループの「一揆戦術」に対する反発である。これは失敗した戦術であった。ここから，プロレタリアートの闘争におけるブルジョア分子の有害性という「伝説」が生じた，とミヘルスは説明している。

第三に，当時ミラノに創設された超階級的御用組織「職工協会」Consolato operaio の「政治屋」に対する反発がある。

この「稀な」組織は結局，「社会主義」の基盤には一度も立たなかった。「未熟な思想」に基づいた，「幼稚な」段階にあるイタリア労働運動の産物であった，というのがミヘルスの結論である。

この『ファッシオ・オペライオ』の立場は「プロレタリア的社会改良」

のと呼ぶのが相応しいとし，実践と経験主義を重視して，必要以上にインター系「社会主義者」の革命的言辞を軽蔑した，と書くとき，ミヘルスはＳＰＤ内の理論と実践の乖離を示唆していた，とみることができよう。

イタリア社会党は，1892年の労働者党創設をもって第一回大会としている。そして，社会党の名称を正式に使用したのは非合法に開かれた95年のパルマ大会であった。この大会で党の憲章が決定されたが，そこで個人加入も正式に認められた。

前世紀末の10年間は，暴動と争議の時代であった。暴動と罷業に対しては軍隊が派遣され，戒厳令と流血とリーダーの逮捕が相次いだ。そういう中で，この第三回大会には知識人の大量参加がみられた。作家エドモンド・デ・アミーチス，詩人コルラード・コルラディーニ，法学者チェーザレ・ロンブローゾがなどがそれである。(5)

さて，ミヘルスは後に長いデ・アミーチス論を書くことになるが，(6) 1904年に初めて，“Ethische Kultur” に「エドモンド・デ・アミーチス――倫理の社会主義者」(N. 93) を書いた。ドイツではまだ十分に知られていない現象を紹介するというのがモチーフである。というのも，もとは「純粋な軍国主義者で君主主義者」のアミーチスの転向は，「第四身分」に歩み寄る人たちに対して，「社会主義の中で統一された科学的理念と人間的理念」が発揮する魅力のほどを示す好事例だからである。

「貴族とブルジョアの生活の空虚」を実感した「老いた将校」は「明瞭な悟性」を有しており，新しい「世界観」への彼の転向は「不可避」であった，という。

といってデ・アミーチスは「科学的マルクス主義」を信奉しているわけではない。むしろ，彼は「詩人，芸術家，理想主義者であり，語の最高の意味でモラリスト」なのだ。「思想家や哲学者」というより「感情的な人間」なのだ。彼のヒューマニズムは，女性問題への関心にも現れている。ミヘルスは，女性の商品化に反対し，完全な男女同権を要求する

デ・アミーチスを紹介している。

ミヘルスによれば，デ・アミーチスのもう一つの特徴はそのキリスト教信仰にある。一般のイタリア人社会主義者（反キリスト教）と違って，デ・アミーチスはそのキリスト教信仰の故に社会主義へと「追いやられた」。このように，デ・アミーチスの世界観の中心にあるのは，「倫理的契機」である。社会主義は「人類の道徳的改善」に貢献すると繰り返し主張された。

興味深いことに，ミヘルスはデ・アミーチスとニーチェを比較して本文を締めくくっている。「このニーチェの時代」にデ・アミーチスは興味深い事例である。ニーチェはエゴイズムに，デ・アミーチスは利他主義と社会主義に帰着した。「二人とも芸術家だが，一方は伝統を引き倒し，それに替えて自己を打ち出し，他方は同じく伝統を引き倒しながら，それに替えて，人類の予言的な人間像でもってよりよく確かな未来を追求する。」

もう一人，この時期の青年ミヘルスの思想的発展との関連で看過できない人物がいる。フランスの社会主義者ジョレスである。この年はミヘルスとフランスの社会主義ならびに革命的サンディカリズムとの関わりが重要なファクターをなす。

フェッラーリスの論文「再度Ｋ.カウツキーの手紙を通してみたミヘルス」[(7)]によると，1903年ＳＰＤドレスデン大会から，翌年1904年にかけて，カウツキーによる精力的な「政治教育」のおかげで，青年ミヘルスは反修正主義の「左旋回」をとげつつあった。

青年ミヘルスは1903年冬から数週間ほどパリに滞在し，フランス社会主義の運動と文化を直接見聞し，それを分析研究した一連の論文をＳＰＤ系新聞に発表した。カウツキーはこれに興味を示し，ミヘルスに手紙を書いた。その手紙は激しいジョレス批判に終始していた。というのも，当時のミヘルスはジョレスを好意的に評価していたからである。

ジョレス（1859-1814）は「中産階級の道徳的進歩によって全面的な階

級闘争の機先を制することができる」と信じる，「改良主義的な理想主義者」であった。普選と議会主義こそ大衆の正統的な闘争方法としていた。といって，独断で入閣を決めた社会主義者ミルランほどの妥協主義ではない。「フランス社会主義の指導者の中でも最も偉大で，かつ最も愛された人物」であったと言われている。(8)

実際，青年ミヘルスのジョレスに対する好意的姿勢は1904年になっても消え去ったわけではない。

ＳＰＤを痛烈に批判した新聞記事「＜生徒問題＞批判」(N. 82) を見てみよう。ミヘルスはジョレスによるＳＰＤ批判を「正しい」として詳しく紹介している。

ミヘルスはまず，ジョレスが “Le Petite République” に書いた記事「ドイツ国会での国家論争」を詳しく紹介している。それは，国家権力の奪取問題について，「我々はドイツの同志と議論したい。ただし，その問題が彼ら自身にとって切実になったなら，」という皮肉な言葉で始まる。「それまではどうか，彼らの不寛容な教条主義の議論は御免こうむりたいし，生徒の宿題を思い出させるようなその雑文で我々をわずらわせてほしくないものだ。」要するに，中世国家ドイツの社会主義者は，フランス社会主義者が直面しているような問題，実際の統治をどうするかというような問題については「絶対に」判断できない。「我々フランス人は自由な国家，共和国に暮らし，貴方たちドイツ人にはまったく考えられない運動の自由を享受している。」したがって，皆様に助けてもらうようなことは無い。「あなたがたの原則など御免こうむりたい。我々は実際的なことをしているのだから。」おせっかいは止してもらいたい，これがジョレスの言い分であった。

ミヘルスによると，これには二重に正しいものがある。フランス国家がドイツよりも「発展している」こと，つまりフランスでは，ドイツではお馴染みの「警察国家」などお目にかからない。よって，この「相対的国家発展」のせいで，ドイツとは異なる課題をフランス社会主義者が

もつこと，これはもっともだ。従ってフランスの多くの進歩的な社会主義者の行動がドイツで「正しく」理解されているとはいえない。ミヘルスの反プロイセン，親フランスの姿勢が明白である。

しかしミヘルスはジョレス批判も付け加えている。即ち，ジョレスが「批判の自由」をも拒むとしたら，それは間違いだ。「自由な批判」こそ社会主義を生み出し，発展させてきた。「社会主義」という共通の判断基準による「相互批判」こそ「社会主義的国際主義」発展の条件でる。

批判の自由と社会主義は直接関係ない，むしろ形式的でブルジョア的な問題であるといえよう。

この時期のミヘルスのジョレスに対する姿勢はアンヴィヴァレントである。というのも，ＳＰＤ批判については共感的だが，議会主義と改良主義については批判的だからである。(後述)

2) ＰＳＩボローニャ大会[9]

1902年のイーモラ大会は，結論的にいって改良主義の勝利におわった。といって革命派が消え去ったわけではない。エンリーコ・フェッリは『社会主義』誌上で，アルトゥーロ・ラブリオーラは『アヴァングアルド・ソチァリスタ』紙で，論陣を張っていた。ローマ大会以来「非妥協派 Intransigente」と呼ばれていたフェッリは，しかし次第にラブリオーラから離れはじめ，「中間的立場」をとるようになっていった。そして1903年４月より『アヴァンティ』の編集長になった。(1908年まで)

刑法学者ロンブローゾが非常に高く評価したフェッリは，刑法と人類学へマルクス主義をもちこんだ。[10]

ミヘルスはフェッリと個人的にも親密な交流をむすんでいた。1905年にはブリュッセルの新大学で一緒に教壇に立ち，1908年にはフェッリの著作『革命的方法』を独訳して長い序文を書いている。[11] (N. 217) ＰＳＩでラブリオーラ・グループの影響力が強まるとともにミヘルスはフェッリ寄りの立場を鮮明にしていった。ラブリオーラ・グループはミラノ支

部を席捲し，４月ボローニャ大会で革命派の勝利を期待したのだが，そのためにはフェッリとの協力が必要だった。

ミヘルスはＰＳＩボローニャ大会で，革命派が勝つために奔走した。ドイツの正統派マルクス主義者カウツキーを味方に引き入れたのもそのためだった。カウツキーからラブリオーラ支持の手紙をとりつけ，自分の添え書きをつけて送った。

「親愛なるラブリオーラ，以上が貴兄の問題に対するカウツキーの返答の忠実な翻訳です。カウツキーが，イタリアの友党の内部闘争で，自分の共感をはっきり表明したので，ご満足のことと信じます。私としては，ご存知の通り，原理原則の上で貴兄と同じです。とりわけ，私をトゥラーティと分かつのは君主制です。ボローニャであいましょう。」(12)

さて，フェッラーリスはこのエピソードを非常に重視している。まず，この時期のミヘルスとカウツキーの密接な関係を実証していること，ミヘルスのラブリオーラ支持の理由が「共和制」にあることを示しているからである。もっとも，ラブリオーラはこのボローニャ大会より，次第にサンディカリズムに傾斜していくのだが，ミヘルスはフェッリとラブリオーラの協力に固執した。さらに，カウツキーとＰＳＩ革命派の協力のために尽力し，８月の第二インター・アムステルダム大会に臨もうとしていた。

ボローニャ大会についてミヘルスはいくつかのＳＰＤ系の新聞に随時連続の速報記事を書いている。(N. 95) ４月８日から10日にわたって行われた大会は当初から「党分裂」の危険性を秘めていた。トゥラーティ，ビッソラーティ，ボノーミ等の改良派と，ラブリオーラ，モッキらの「非妥協派」が２つの対抗軸を形成し，両者の中間に中央派がいた。中央派はひたすら党の団結と統一を望んでいた。フェッリがその中心的人物だった。

トゥラーティは「この未だに中世的なイタリアでは，我々は依然として民主主義の仕事を果たさねばならない。」そのためには，共通の目標を

もつ近いグループとの協力も必要と主張していた。「王制」を排除しない「共和国民」の創造という奇妙な構想を抱いていた。君主制は直接反プロレタリアート的にならない限り，「利用」すべきだと考えていた。「君主制」は主敵ではない。「ブルジョアジーの方が君主制より反動的でありうる。」また，革命派はＳＰＤに頼りすぎだと批判していた。そもそも二つの国は事情が違い過ぎる。ドイツの同志は「超反動的な政府とブルジョアジー」を相手に戦わねばならないのだから。イタリアの事情は社会主義者の「政権参加」を必要としている，と主張した。

方法としての暴力行使には否定的だった。ラブリオーラが引用したマルクスの命題は，「限定つき」でのみ正しいとした。即ち，「果実が熟したときが来たら，暴力は助産婦になりえるのだ。だが無知でカッカしやすく，アナーキーなプロレタリアートのうちに暴力の教説を吹き込む者はその責任をとらねばならない」とラブリオーラを批判した。

ミヘルスの報告からも，ラブリオーラをアナーキーとする批判が多かったことが分かる。

ラブリオーラ派のロンゴバルディは，体制は毎日暴力を行使していると反批判した。

ラブリオーラは「非妥協的なマルクス主義」を堅持しており，カウツキーの影響で，ドレスデン決議と類似した決議案を提出していた。一切のブルジョアジーとの協力を拒否し，反君主制を社会主義の根本原理としていた。また，「議会による私有財産制の廃止」は不可能と主張した。妥協は「売春」に等しい，と。

しかしラブリオーラは自分をアナーキーとする誹謗に強く抵抗した。何故なら，「歴史の必然性」を認め，「一揆主義」を認めないからである。また，間接的効果しかないとしても議会主義活動と改良主義的活動は否定しない，と。

フェッリは，本来改良は「ブルジョア民主主義」の仕事なのだが，イタリアにはそれが存在しないため，社会主義者が「改良」と民主主義を

追求せざるを得ないと考えた。もっともプロレタリアートの代表の入閣には反対した。

結局，第１回投票ではいずれも過半数におよばず，第２回投票でフェッリ案が採決された。

フェッリとラブリオーラの協力はならず，「従って，大会は期待された解明をもたらさなかった」とミヘルスは書いている。

ラブリオーラは『社会改良と社会革命』で，党における今日の危機の原因は改良主義のみではなく，「組織の形態」にもある，と分析していた。(13) 即ち，これは全ヨーロッパの社会主義政党にみられることだが，「党が，教養あるブルジョアジーや，階級の出自を忘れてブルジョア化した労働者の小グループの手中にある」ことだ，と。ミヘルスも，対立・抗争の始まりは「議会フラクション」とプロレタリアートの乖離にある，と分析していた。指導部の階級的裏切りが共通の認識といえよう。

N. 95の報道記事では比較的客観的姿勢が保たれていたが，大会前に書かれた他の記事には，彼の反修正主義的姿勢が明白に読み取れる。

４月２日の「決定の前に」（N. 94）でミヘルスは，ＰＳＩは「岐路」に立っている，即ち，「袋小路から脱出して，かの大道を行く」のかどうか，と問い質していた。

トゥラーティ派（イタリアでは改良主義者と呼ぶが，ドイツでは修正主義者と呼ばれるとミヘルスは注記している）は，前回のイーモラ大会で多数派を獲得したのだが，今やフランスの「ミルラン主義」に匹敵するだけの勢いである。ミヘルスは改良主義者の「心理的契機」に注目する。出来るだけ早く具体的成果（改良立法）を目にしたい願望である。それは，「人間的によく分かる渇望」として評価できるが，他方それは，「社会的，政治的に重要な内的関連への洞察力の喪失」を意味する。そして，万能薬としての議会主義に対する過大評価が生まれてくる。結局，ブルジョア国家への参加によってのみこの改良の仕事が達成出来るという「迷信」をイタリア・プロレタリアートに植え付けることになった。

トゥラーティは，社会主義の「理論的墓掘り人」に他ならない。階級闘争論は，彼によって，「反動的」ブルジョアジーに対する，プロレタリアートと「近代的」で「啓蒙された」ブルジョアジーとの「共同闘争」へと歪曲された。従って，党内の革命的分子を「警察」にかわって弾圧するのが，党の使命にすらなった。

翌4月3日の文章も同じ論調であった。(N. 97「イタリアにおける修正主主義と党」)「最終目標」に比べると無に等しい「改良立法」に携わることは，「偉大な社会主義社会への眼差しを濁らす」，と。彼らの「党の原則に対する裏切り」にフェッリとラブリオーラが「必死の戦い」を開始した。ともあれ，ミヘルスはボローニャ大会が党の「分裂」をもたらす可能性を見越しつつ，党の「団結」と「社会主義精神」の堅持を期待していた。

大会の最中，4月9日付けの記事(N. 100)で「党の新しい政策」を報告しつつ，修正主義を分析している。それは，1900年，「多くの新しい事態と新しい思想」に対応せねばならぬという半月誌 “La Critica Sociale” でのトゥラーティ自身の表明によって開始された。プロレタリアートの自覚と党の成長にともない，体制側からの「取り込みの策略」が行われる。閣僚の椅子がその罠である。かくして，修正主義は「議会主義の過大評価で始まり，プロレタリアートの意識の過小評価で終わる。」「不当にも自由主義を僭称する」ザナルデッリとジョリッティの太鼓持ちに成り下がった。『アヴァンティ』前編集長で改良派のビッソラーティは，失業問題の解決策として植民地への失業プロレタリアの移民を勧めさえした。

本大会はこの意味で「党の存立」をかける大会である。しかし，彼の期待は中途半端にしかかなえられなかった。4月15日付けの「党の団結」(N. 99) はトゥラーティの「階級協調」路線と党活動での「個人主義」を批判する。修正主義派は「民主主義の枠内での，民主主義の最も有効な武器，即ち，目的意識を持ち，団結した集合意思で導かれた組織」を

否定した，と。しかし，ミヘルスは党の「団結」を保持するためには，ラブリオーラ案ではなくフェッリ案が採択されたのもやむを得ないと評価していたようである。

理論と実践というマルクス主義の中心テーマについて，青年ミヘルスが述べているところは興味深い。修正主義は「実際の仕事」対「不毛な理論」と対置させるが，それは誤りだ，「社会主義理論は，現実に実践的な日々の仕事の指針，根拠を与える」とミヘルスは主張した。

以上はドイツの新聞に発表されたものである。ここにボローニャ社会主義者の週刊誌 “La Squilla” に書かれた文章がある。（4月16日，N. 102）どうやら，修正派らしい編集長は，ミヘルスとは「意見を異にする」とことわりながら，これを掲載した。ミヘルスは先ず前年ドレスデンでの低次元な経験に比べ，ボローニャ大会が「真面目で高度」だったと評価する。「社会主義精神」が「個人攻撃」から免れている。ここでは，ミヘルスのラブリオーラ批評が興味深い。暴力の解釈と，「正しい前提から導き出された，（私見では）間違った結論」にミヘルスは異議を唱えているからである。

これを読む限り，ミヘルスとラブリオーラの協調関係について，フェッラーリスは過大評価していると思われる。

ここでもミヘルス得意の，イタリアとドイツの環境相違論が展開されている。編集者も，ミヘルスは「制度と状況」でイタリアとは異なるドイツ人の印象を語っていると述べているが，ミヘルス自身も若干の比較を行っている。

イタリア独自の現象なのか，党大会出席に際しては鉄道料金が半額になるのに対し，ロシアのツァーリズムより専制的な君主国ドイツでは，鉄道はせいぜい中立的なだけである。社会経済的な比較でみると，イタリアの産業化は始まったばかり，ブルジョアーは弱体で「堕落」しているし，小ブルジョアジーが依然優勢なのに対し，ドイツでは産業化は最高頂に達している。ただドイツでは，「カースト精神」が支配している。

しかし，こういう相違の故に，社会主義の「最適の形態」が，ドイツでは革命派，イタリアでは改良派と結論づけるのは誤りであるとミヘルスは主張している。そして搾取と階級支配が存在する限り，「社会主義の根本精神」に違いは無いはずである。君主制とブルジョア国家に対立する「非妥協性」が，唯一の社会主義への道であると断言する。トゥラーティの改良主義は，こういう「社会主義からの逸脱」に他ならないのだ，と。

ボローニャ大会でミヘルスは，ＳＰＤを代表して公式の挨拶を行った。そこでミヘルスは，ＳＰＤの反議会主義を自負しながら，反君主制ではドレスデンとボローニャは共通だとアピールした。

ところで，上のラブリオーラへの添え書きでミヘルスは原理原則でラブリオーラに同意している，との言明したのだが，これはしばしばミヘルス＝サンディカリスト命題の証拠としてとりあげられる。(14)

しかしここに，必ずしもそう単純にはわりきれないもう一つの文書が存在する。

それは，この年出版されたラブリオーラの著書『社会改良と社会革命』に対するミヘルスの書評である。これは丁度ボローニャ大会と同じ４月の “Die Neue Zeit” (N. 28) に書かれたものである。(15) その基調はむしろ批判的なものであった。

ミヘルスは先ずこれまでのイタリア社会主義史を短く回顧し，「社会主義の諸概念に関するたちの悪い腐敗が進行してきた」と，改良主義を断罪する。「議会主義は手段から目的になってしまった。」ブルジョアジーとプロレタリアートの階級闘争は，＜反動的ブルジョアジー分子＞に対する＜啓蒙されたブルジョアジー＞とプロレタリアートの同盟軍の戦いへとねじまげられた。党の目標は「平和と，国家の世俗的性格維持」という名の軍拡と君主制へと矮小化され，階級解放と共和制はないがしろにされた。トゥラーティ，クリショフ，ビッソラーティ，プランポリーニがその項点におり，彼らは修正主義の政治的帰結はブルジョア政権へ

の入閣にあると宣言した。

そういう情勢の中で本書の意義が理解さるべきである，とミヘルスは主張する。ただしボローニャ大会に向けて状況を明確にするために書かれはしたが，(1903年11月—12月に執筆，序文２月１日づけ）それが成功したかどうかをミヘルスは疑っている。

次いでラブリオーラによるＳＰＤ批判——「革命的精神の喪失」——が紹介される。カウツキーとベーベルが選挙の勝利と選挙権の剝奪のことだけを気にかけ，「出来るだけ早い社会主義理想実現の方法」に思いを及ぼさないことに驚くラブリオーラ。

選挙戦術は現状維持に手を貸すだけであり，資本主義の根本的批判には結びつかない。そして，ラブリオーラはＳＰＤに「プロレタリア革命の実現の手段として」暴力的方法も辞さないよう勧告する。(著者のラブリオーラは表紙のタイトルの下に題辞として，マルクス『資本論』の有名な一句「暴力は、新しい社会をはらむ，すべての古い社会の助産婦である。それ自体が経済的な力なのである」を掲げている。)

ミヘルスはこれをＳＰＤの置かれている政治的環境に関する無知を示す，と反批判している。ショック療法としての暴力行使は不適切とするフェッリにミヘルスは賛同している。

しかし，前にも触れたように，ラブリオーラの暴力戦術の故に，彼をアナーキストとするのは誤りであるとミヘルスは弁護する。議会主義を全否定しているのではなく，プロレタリアート革命の梃子として認めているから，と。

次に，党と労組の一体化の主張が紹介される。「党と労組の融合」という，「党の弱体化」案，党の浄化案，「純粋に労働者の党」のテーゼである。

ラブリオーラによれば，ＰＳＩの改良主義的堕落の原因は，その指導部で「ブルジョアジーの指導者，ブルジョアジーの転向者」が優位を占めたからである。しかも，そのほとんどは「修正派」に属している。「社

会党がブルジョアによって占領され，全労働運動が自分のではなく，根本的に対立する利害に奉仕させられるという」理論的，実践的危機が存在する。従って社会党は，ブルジョア，小職人，小農を排除すべきなのだ。ミヘルスはこういう判断を，ミラノの職工党を思想的に継承しているラブリオーラならではの発言とみる。しかし，ミヘルスは異議を唱える。マルクスもラブリオーラもブルジョア出身だ。我々の全運動の示すところでは，「平均的に，労働者階級出身の指導者の方が，背後の橋を全部焼いてしまった革命的な元ブルジョア」よりも，妥協に傾きがちだ。従って，党からブルジョアや職人層や小農を排除することはもってのほかだ，と。結局，ラブリオーラが，党を現下の危機から救うという方策は，「希望のもてる救済策」ではないどころか，新たに「兄弟争い」を招くだけだ，と結論的に批判する。

しかし本書が書評に値するのは，ラブリオーラの強い姿勢と，革命的プロレタリアートの原則の勇敢な弁護により，党の実際政治への影響力では小さいけれども，党内に瀰漫する普遍的な倦怠と沈滞の払拭に少なからず貢献したからである，としめくくっている。

フェッラーリスがこの書評を重視するのは，それが，先にカウツキーの手紙への添え書きで，ミヘルスがラブリオーラに「原理原則の上で貴方に同意する」のことばを，ミヘルスの，ラブリオーラのサンディカリズムへの「明白な同意」とする解釈が誤解であることを示してくれるからである。

3) インター・アムステルダム大会とＳＰＤブレーメン大会

1904年8月のインター・アムステルダム大会は，修正主義論争に，ＳＰＤが強引に決着をつける結果になった。というのも，ベーベルは前年のＳＰＤドレスデン決議を大会で承認させることに成功したからである。敗北を喫したのはフランスのジョレスであった。しかし，自らの戦術をすべてに押し付けようとするＳＰＤに対するジョレスの歯に衣着せない

指弾は，一大センセーションを巻き起こし，それは彼を一層有名にした。それは前例の無い弾劾であった。ヨーロッパの「政治的，社会的進歩」を阻害している元凶は，「ドイツ社会民主党の政治的無力」である。カウツキーの「硬直した理論的定式」の背後にＳＰＤの「行動の無能」がかくれている，と。(16)

後に触れる N. 116 論文でミヘルスは，このジョレスの弾劾は「根拠の無いものではなかった」と評価するようになる。これはカウツキーのミヘルスへの影響力の減退を示すものであるといえよう。ともかく，ＳＰＤとカウツキーを相対化する足場がもう一つ増えたことにはなろう。

前年から青年ミヘルスは，修正主義と改良主義を，「原理的問題」として批判してきた。ラブリオーラの雑誌 “Avanguardia Socialista” に発表した論文（N. 107）では，ベルンシュタインとジョレスを「幻想的社会主義」として，初めて真っ正面から批判した。それは世界を「バラ色の眼鏡」を通してしか見ようとしない「楽観主義」である。そして，何年か先のご馳走よりも，ただ今の「パン屑」を優先させる，例の改良主義の心理学を展開する。この楽観主義は「強烈」だが「無邪気」で時に「狂暴」でもある。

ジョレスはヨーロッパに「自由の回復」が見られつつあるという「耐え難い空想」をもて遊び，ベルンシュタインは階級闘争が，「社会的寄生者」にたいする「全市民の戦い」に転化することを望んでいた。しかし，ミヘルスによれば，ここでベルンシュタインのいう全市民の実体は，プロレタリアートではなく，小資本家に外ならない。ベルンシュタインの階級協調路線はミルラン，トゥラーティ好みのものである。彼はジョレスと同様，それを「あいまいな正義感」に基礎づけている。それは「歴史的」でも「唯物論的」でもない。ドイツの現実にも合致しない。なぜなら，ドイツほど「階級闘争」が明白なところは他に無いからである。「ドイツの階級闘争には和平も休戦もない。」

フェッラーリスはベルンシュタインの「あいまいな正義感」を「倫理

的な社会主義」と呼んでいるが，青年ミヘルスにもそれが見られることは，本稿でも幾度か指摘してきたところである。そのことは，後で触れるN. 122論文からもうかがえる。

ところで，インター・アムステルダム大会（8月15日）へ向けて青年ミヘルスは精力的に活動した。フェッラーリスは「カウツキーの手紙」論文で，この時期のミヘルスとカウツキーの書簡を詳しく紹介している。ミヘルスは自分の論文「現代の社会主義における国際的混乱」(N. 122)をカウツキーの雑誌 “Die Neue Zeit” に掲載するよう依頼した。

それは宗教，決闘，民族問題，君主制に関して各国の社会主義者の間に不一致が存在することを指摘し，「少なくとも，最重要問題については考えの一致が不可欠であると確信する」と主張した論文であった。「宗教に関する完全な意見の自由，決闘の禁止，民族性とその社会主義政党の自由，厳格に反王朝的な戦術，外国人社会主義者の感情の尊重，これらは国際的社会主義で同じように絶対的で不可侵の原則であるように思われる」と。しかし，フェッラーリスも言うように，これらのは「社会主義の最重要問題」であるどころか，「ブルジョア・ラディカル」の圏内に属するものであったし，本稿は「ドイツ・モデル」の強調も目につく，「まとまりの無い」文章であった。(17)

もっとも，ミヘルスはここで比較という方法を適用しているのであり，そのため対象から距離をとる必要があったことも忘れてはならない。

ともあれ，これにカウツキーは返事を書いた。そこで彼は発表を断るだけでなく，そもそもどこにも発表しないよう青年ミヘルスに勧めた。カウツキーには非常に不満であった。「階級闘争と権力奪取」という中心問題に集中せよ，と。さらにカウツキーは，後のウェーバーと同様に，「無数の相違にあわただしく外見だけに触れる」ことですませないようにと，6月末の手紙で再度吟味を勧めた。

7月ミヘルスはこれを “La Riforma Sociale” に掲載すべく編集者の経済学者ルイージ・エイナウディに手紙を書いた。そこで青年ミヘルス

は，この論文が「内容のみならず，形式でも混じりけ無く社会主義的である」と自負していた。カウツキーはこのミヘルスのやり方に憤慨し，「無益で有害でさえある」と批判した。「なぜなら，政敵に我々の立場の弱点を発見する方法を教えておいて，我々の方はそれを矯正する可能性を与えられていないからである」と。この指摘はまんざら誤っていたわけではない。[18] エイナウディとその雑誌はブルジョア・イデオロギーに属していたからである。もっとも，この雑誌に投稿したのは今回が初めてではない。

フェッラーリスによれば，青年ミヘルスの著作は，それらがどれだけ「政治的効果」を志向していたかを示している。[19] さらにフェラーリスは，ミヘルスが政治活動をする場合の「もろさ」「無防備なほどの無邪気さ」「無器用さ」を指摘している。

この年の青年ミヘルスの最も重要な著作は，10月にフランスのサンディカリズム系の雑誌 “Le Mouvement Socialiste” に発表された論文「ＳＰＤの危機」（N. 116）である。これはミヘルスによる「ＳＰＤに対する最初の苦悩に満ちた批判的分析」[20] であるが，それを準備する作業も予めなされていた。

本年初頭に発表された「ドイツ・ブルジョアジーの性格」（N. 80）は，なぜＳＰＤにブルジョア市民が少ないかという問題を解決しようとする。言い換えれば，「非プロレタリアの世界へ倫理的，自由主義的そして社会主義的世界観が一層浸透するうえでの障害」を究明しようとする。ミヘルスは，1)経済的ファクター，2)思想的動機，3)国家社会観，4)社会的無関心，以外にドイツ・ブルジョアジーの「外面性」（みせかけ）への執着をとくに取り上げる。より具体的にはドイツにおける貴族の強い威信とブルジョアジーのそれに対する敬意を指す。ドイツのブルジョアジーほど「称号願望」に毒された国は他には無い。この称号コンプレックスは「女性問題」として指摘しうる。つまり，既婚女性の呼び方は，イタリアのようにシニョーラではすまないのであり，夫の肩書き付きで呼ば

れるというわけである。

啓蒙されていないドイツ・ブルジョアジーにはドイツのアカデミカーも属する。労働運動の「階級憎悪と概念の混乱」(N. 85) が,「事業者が気高い心を発揮するのを」妨げている，という「古典的な判断」を示すシュワルツの本 (『道義的生活』) を批判して，ミヘルスは，そこでは「最も単純な社会的事実の無知」が歴然としているし,「社会問題」を「倫理的側面」からのみ見て,「経済的側面」を見ない，と指摘する。プロレタリアートが「貧しさと無教養」ゆえに偏見を抱くのはやむを得ないが，インテリは「冷静かつ公平」に判断できるはず，と主張する。シュワルツにおいては「学問」は,「雇用者に奉仕し，労働者階級を侮辱する。」学問の客観性とイデオロギー性（階級性）という，ミヘルス社会学のもう一つのテーマに関連してくる。

青年ミヘルスにとって,プロレタリアートの解放とは単に経済的な(搾取からの）解放のみならず，精神的・文化的な発展をも含意していた。そして，人間の倫理的契機はその解放の目標であると同時に，解放のプログラムで重要な働きを果たすべきと考えられていた。

「人類は倫理的な文化にどのようにして到達できるのか」というテーマに取り組む論文「階級闘争の倫理」(N. 88) は，個人倫理の社会的次元を考察したもので，同一テーマを扱った前年の諸論文 (N. 46,49,54,68) と同じ “Etische Kultur” に発表された。

先のテーマは「純粋倫理家」と「社会民主主義者」の間での共通の目標だけに難問であると先ず告白することから初めてている。

先ず,「真理」とは「永久に待つべき女神」の如きものではなく，戦い取られるべきだという命題から出発する。「戦い無き真理は，法的規制の無い自由に等しい。」真理と倫理とが闘争を媒介として結び付けられる。無規定の自由ではなく,「経済的可能性との関連で考えられた自由」がここでは考えられている。前年の論文で青年ミヘルスが好んで引用した新カント派のフォアレンダーの言葉,「適切な社会制度が無ければ個人倫理

の真面目な実行は不可能なのである」，の延長上にある。二つの大きな社会階級よりなる資本主義社会における倫理とは，純粋に真空の中では考えられない。ブルジョア階級の死滅従って社会主義社会でのみ「個人の発展可能性という普遍的権利と，個人の全体の善への従属の義務——権利と義務とは決して対立しない——」が実現しうる。

さてここで問題が生ずる。

以上は，来るべき未来社会の問題だったが，それへ至る過程としての階級闘争での倫理とは何か。ミヘルスの答えは，上の最終目的に「背かない」手段と方法で，ということになる。即ち，この階級闘争が「正しい路を行くこと」，言い換えれば，＜文明的＞な仕方で行われ，「新しい階級支配をもたらさない仕方で行われること」。最後の規定が最も重要であることは，明白であろう。階級闘争は，階級的「特権」の廃止を目指す「歴史発展の梃子」以外の何ものでもない。前回論じた，階級闘争＝「階級憎悪」(ペンツィッヒ) に反駁をくわえ，階級闘争とは「自我を超えて作用する連帯と友愛の感情，人類の＜自然的所与＞の苦悩ではないすべての苦悩の廃棄を求める階級闘争を目指した階級意識の覚醒」である，と定義される。階級エゴは，ブルジョアジーの闘争を引き起こす当のものである。又，資本主義の搾取による苦悩は決して＜自然的所与＞ではない。ブルジョアジーがそう見せたがっているだけである。多くの倫理家がとらわれてきた理念である闘争の非暴力主義は，階級対立とブルジョアジーによる暴力的弾圧という「現実」を全く忘れている。のみならず，「汝，誰にたいしても指一本触れてはならぬ」というのは，ただ現状維持に奉仕するのみならず，階級闘争，従ってその原因である「社会問題」の存在そのものを否認するイデオロギーと化す。

要約すると，文化享受を含めた「新しい社会価値」の実現は経済的条件の改善（ミヘルスは「労働全収権」としている）無しには不可能である。又，階級闘争も非暴力主義（「誰をも傷つけず」）には原則的には立たないが，にもかかわらず，それは「今世紀の最も偉大な文化的，倫理

的思想」なのだとされる。階級闘争は「精神的圧迫，民族抑圧，ほんのわずかの特権的少数派による大多数の経済搾取」から脱出できる「唯一の方法」だからである。目的の倫理性が方法のそれを規定する。目的とは「共同の労働と広範囲で高度の文化形式の獲得，人間的な道徳浄化のための人類的連帯」に他ならない。従って，階級闘争は「比較にならないほどわずかの悪という意味で，倫理的必然」ですらある。「純粋な手段による戦いは純粋な目的思想の自明な確立である。」それは真理である。普遍的に妥当する。しかし，真理は常に「徳」とは限らない。「倫理的には支持できない経済秩序」の厳存こそが問題である。それとの戦いを否定するものは，木を見て森を見ない者に等しい。個人倫理での「純粋な手段」は，現存社会のように経済的にも，また「精神的にも頭の皮を剝がされる」現実を前にして，後退を余儀なくされるのである。

階級対立の社会では，民族性（N. 89）や人種や性よりも階級が決定的である。女性労働者は，二重に劣位にある。ホテルの女性プロレタリア（N. 103）についての現状報告がそれを具体的に示している。過酷な労働条件は「道徳的」堕落の原因である。ドイツでは，イタリアのように彼(女)自身による自発的なストもおこなわれない。「組織と階級意識のみが改善をもたらし得る。」この小論「ドイツにおけるホテル従業員」が興味深いのは，改良主義批判の意図でえ書かれているからである。即ち，ドイツではビスマルクによる「社会改良」の古典的な国である。しかし，ブルジョア的方法とおそまつな対策でしかない。のみならず，「ドイツでは労働者のためにあらゆることがなされている，よって彼らに文句を言う権利などない」として，社会主義者否定の口実に使われている。従って「立法に期待を寄せることは，ユートピアである」と断定される。

同じような錯覚に陥ったのがＦ.ラサールであった。没後40年に当たり，ミヘルスは一文「フェルディナンド・ラサール」（N. 108）を書いた。ＳＰＤの歴史に一時代を画した象徴的な人物である。彼の「賃金鉄則」理論と「国家の信用の上に築かれる生産組織」という構想を，「不十分な

理論には不十分な戦術が対応していた」と一蹴している。結局ラサールは「体制と妥協し」,「社会的王国」に擦り寄ったのである。「体制の階級的性格を完全に見逃した」。所詮「ラサールはマルクスではなかった。」もっとも，彼の個性の問題ではなく，「時代の環境」の問題でもある。もし彼が「階級意識と自己意識のあるプロレタリアートを持っていたら，また，彼に盲目的に従う青年ではなく，批判的に思考できる党員を有していたら」，ラサールは別のものになっていたであろう。

もっとも，彼が「眠れる巨人，プロレタリアートを無気力から揺り起こし」，普選が「第四身分の解放」にとって重要と主張し，「労働と科学の結びつき」を発見したことは，一つの「福音」であったとして評価している。

ＳＰＤブレーメン大会の５日間，理論的にも実践的にも「積極的な仕事」はなされなかったと，青年ミヘルスはこの大会について，イタリア社会党機関紙『アヴァンティ』（９月末）に書いている。「現在の危機を凝視するために目を見開くのを躊躇している」と極めて否定的である。（N. 111）

実は，1902年ベルギー普選獲得のための大衆ストライキ，翌03年４月のオランダのゼネストそしてローザ・ルクセンブルクのゼネスト擁護論とレギーンと党指導部の「拒否的態度」というふうに，大衆ストライキをめぐる「火花」[21]は，ＳＰＤ全体に燃え広がんとしていた。おりしも，イタリアでは９月サルデーニャ島の鉱山での争議に端を発した大衆罷業は９月16日の全国的な総罷業にまで発展した。

山崎によれば「イタリア国民がはじめてみた巨大な全国罷業であった。しかしただそれだけであった。たしかにブルジョアジーを憂慮と恐怖におとしいれたにしても，騒乱の幾月かがすぎると，総罷業は何も跡を残さず消え去った。社会党改良派は大衆の自然発生的な行動におどろき，なすことを知らずに，これに追随したにすぎなかった。明確な一貫した政治指導は，そこには存在しなかった。改良派の立場からは存在しよう

もなかったのである。革命派が痛感したのはそのことであった。[22]」

ミヘルスとカウツキーはこのイタリアでの総罷業に祝意を表明すべく動議を大会に提出したが，フォルマーとベーベルの反対により撤回を余儀なくされた。(N. 111)

ドイツの新聞に11月23日に発表されたN. 115論文「ブレーメンの遺産（批判的な光線）」でも，「この大会で，政治的大衆ストとしてのゼネスト問題を討議しなかったことは大きな怠慢の罪だ」と断じた。ゼネストを「階級闘争」の武器とみることに党は反対した。イタリアのゼネストへの「同志としての連帯」の表明は「反党的」のようにおもわれたからである。

「そもそもゼネストが政治的に組織されたプロレタリアートの武器庫にいれるべき」とミヘルス自身は主張して，そのような「重大問題」の回避は，しかし，前年のドレスデン大会の帰結であるという。これは，ミヘルスが党大会の議決より，党それ自身の生理の問題であることに気づき始めた印である。

4) 革命的サンディカリズム

さてこの年の青年ミヘルスの思想の最良の収穫，論文「ＳＰＤの危機」（N. 116）は，フランス語の雑誌 Le Mouvement Socialiste（10月）に発表された。この雑誌はフランスの革命的サンディカリスト，ロベール・ラガルデルが1891年から1914年にかけて発刊した雑誌であり，「それまでにフランスで発行された革命的定期刊行物中，おそらく最良のもの」といわれている。[23]

革命的サンディカリズムとは，マルクス主義とは別の，反議会主義を特徴とする労働運動であり，「労働組合の実施するゼネラル・ストライキを行動手段として社会革命を実現」しようとする。[24] 1890年代から1914年にかけてフランスで発生し，1893年—1906年が最盛期であった。

ボルシュヴィズムとの比較では，

1)＜労働運動の自律＝政治的代行主義の否定＞，反議会制の労働者主義，反代表主義

2)＜目的と手段の一致＝経済革命志向＞

が特徴である。[25]

さて，N. 116 論文についてだが，その吟味の前に予め銘記しておいた方がよいことがある。フェッラーリスはこの論文がミヘルスの「政治思想の基本テーマ」を「先触れ」しているために，「特別の注目」に値するとして詳しく紹介しているのだが，これがフランスの革命的サンディカリズム系の雑誌に発表されたという理由から，ミッツマンやビーサムのように，これと共にミヘルスの革命的サンディカリズムの時代が始まったとするのは「単純すぎる誤った解釈」[26]であると，先ず忠告している。フランス・グループとの関係の意義を軽視するのではないが，「公平な判断」のためにはまず次のことを銘記すべきであるという。

1907年まで青年ミヘルスは依然政治評論家なのであり，多くの国の様々の雑誌に投稿していた。それらの政治的立場も多様であり，ブルジョア急進派（エイナウディの “La Riforma Sociale”, コラヤンニの “La Rivista Popolare”, そしてペンツィッヒの “Ethische Kultur”）から，ＳＰＤ系各派(中央派カウツキーの “Die Neue Zeit”, 急進的な “Leipziger Volkszeitung”――これにはＳＰＤ入党時のローザ・ルクセンブルクも協力していた――）それに加えて，女性解放誌クララ・ツェトキンの “Gleichheit” に及んでいた。これには，経済的理由も作用していた。(エイナウディ宛てに「書いて生活せねばなりません」と書き送っていた。)従って，投稿雑誌から彼の政治的スタンスを決め付けるのは無理である，と言えなくもない。

フランス・サンディカリズム系の雑誌が，ＳＰＤの内部批判を展開するのに好都合であったことは間違い無い。ともあれ，このＭＳグループとの接触は，この時期のミヘルスの思想形成に与えた「影響の一つ」ではあれ，「合流点」ではなかった，というのがフェッラーリスの解釈であ

る。

さて，「ＳＰＤの危機」論文は，先ず，IIインター・アムステルダム大会での，ジョレスによるＳＰＤ弾劾演説の好意的な紹介から始めている。それは，「根拠の無いものではなかった」と。

ミヘルスによれば，ＳＰＤは，300万票（有権者の三分の一）を獲得できる世界随一の社会主義政党である。「もしそれほどの選挙民の力を自由にし得るような党が，それほどの極小の変革さえままならぬとしたら，又，そのような党が小宇宙の状態にとどまるとしたら，そして又，たとえ，不可視ではないとしても，全くとるにたりないものであり，リベラルの意味で国家に影響を及ぼすことさえできないとしたら，そのことは，みじめな不毛さのはっきりした印を示している。ＳＰＤとその発展環境の歴史を知らない人にとってはほとんど信じ難いほどの無力の印を。」

経済的にイギリスを追い越すほどの発展を遂げたのに，政治的には「ヨーロッパで最も遅れた国」，「前代未聞の個人的絶対王政の国」である逆説が先ず指摘される。ドイツを支配しているのは「田舎貴族」である。彼らは前近代的特権をいまだに享受している。「封建遺制」が残存している。ブルジョア的自由主義は未熟であり，政治的不寛容，大学における社会主義者への不寛容は根強い。「ドイツがもし社会民主主義の祖国とするなら，同様に，ドイツは警察絶対主義の祖国である。」

ＳＰＤにゼネストの考えは一切無い。ミヘルスによれば，戦争に際してのゼネスト戦術はドイツでは，成功の可能性が大きいのだが，ベーベルらＳＰＤ指導部はそれに反対し，戦争を「運命」として甘受するだろう。このような「歴史と人類に対する責任」（パリ会議）の放棄は，単にリーダーの裏切りでは説明できない。より深い原因がある。彼らの「誠実さと犠牲的精神」には疑いが無いのだから。

先ず，ドイツ・ブルジョアジーの頑強な反社会主義イデオロギーがある。彼らは，封建的身分制と「野蛮な警察国家」に自由主義の障害を見るどころか，それを「社会主義者の脅威」に対する防壁と見ている。

『青年ミヘルスとサンディカリズム（1904年）』

「漠然たるヒューマニズム」のかけらさえ有していないドイツのブルジョアジーは，君主を利用したいだけではなく「物神崇拝」している。ブルジョアジーのみならず，「他方で，無自覚で盲目，戦争時には兄弟にも跳びかかるつもりの無数のプロレタリアート」が存在する。彼らにも，皇帝物神崇拝は根強く残る。

これが決定的である。ミヘルスは歴史と「民族心理」の両方から説明する。ドイツ史には「革命的事件」が乏しい。ドイツ人の性格は，受動的，優柔不断，鈍重，伝統と環境の奴隷，果断に乏しい，そして絶対的な遅鈍，と手厳しい。この「弱いプロレタリアートが国家を強くする。」ゼネストなど望むべくもない。

ではＳＰＤの責任とは何か。ミヘルスは党と大衆との乖離を重視する。二つを媒介するはずの「教育」は社会主義的ではなく，ただ「選挙」用でしかない。共和制，両性の平等，民族自決という社会主義教義の根本原理はプロレタリアートから消え失せ，党への服従のみが吹き込まれる。「我々の本質的目標は＜政治力の拡大＞である」と修正派のフォルマールは語っている。我々と大衆とをつなぐものが「一時的な選挙幻想や単純な物質的利害」でしかないとするなら，いつでも「大衆は我々を見捨てるだろう。」その点ではＳＰＤラディカルについても同断である，とミヘルスは総否定する。

要するに，「議会主義が社会主義を殺すのだ。」それによって，「我々は理念全体から理想主義的側面を消失させてしまった。」ミヘルスはここでいわゆる俗流唯物論的社会主義観を否定し，自己のそれを対置する。「かって社会主義は，人間の全体をとらえ，彼の人生の全行動を規定する感情であった。」ミヘルスは社会主義の「宗教的精神」という，社会学者グリエルモ・フェッレーロ（1871-1942）の言葉を引用さえしている。「人間の感情と理念が経済的宿命に厳密に依存しているのだ，と毎日説教したおかげで，人は同様に，意思とエネルギーも我々の行動に強い影響力を行使し，生活の物質的厳命に逆らってまでもそうするのだという永久

の真理を否定するにいたった。」それは，「誤解された史的唯物論のいたましい帰結」であると断言する。彼のいわゆる俗流史的唯物論への断固たる否定的姿勢が鮮明となる。

よってミヘルスにとって「人間の全体性」をとらえる社会主義と，大衆に譲歩する日和見主義とは全く別物となる。「ドイツの党が大衆をつかんでいるという信仰は致命的で宿命的な幻想でしかない，逆に大衆が党をつかんでいるのだ。」もっともここで考えられているミヘルスの大衆像は単純ではない。

ともかく，「日和見主義と議会主義」が最大の障害をなす。「立法と議会の機構を使わずには何事もなしえないという主張は党にとって非常に危険である。」しかも無力な議会と半絶対主義的な皇帝の下ではそうするのは「愚かしい。」「社会主義の真の力は議会にはない，大衆の中にある。」ここには，この間精力的に政治的大衆ストを主張したローザ・ルクセンブルクの影響が読み取れる。ドイツの議会は無力だとしても，議会の戦術的価値はミヘルスも認めている。プロパガンダとアジテーションの場として議会に参加するのは社会主義者にとって「重要な義務」である。この議会での「プロパガンダという間接的方法」は広範な「直接行動」に補佐されて有効となる。この「直接行動」は革命的サンディカリズムの特徴的戦術であるが，続けて，ドイツで革命的サンディカリズムを主張したフリーデベルクを批判している。革命的サンディカリズムの唯一の基礎単位である労働組合はドイツでは「フランスと異なって，全くトレード・ユニオン化している。」そして，まさにそこで支配的なのが日和見主義なのである。(27) それに比べれば，党の方がまだ革命主義的である。ベルンシュタインの修正主義の基礎は労組にある，と。“Vorwärts” は事実上労組の機関紙であり，労使協調とゼネスト拒否を基調としている。従って，ドイツの労組は革命的サンディカリズムの住処にはなりえない。労組に比べて社会主義的とされる党だが，それも単純ではない。それは次の言葉からも分かる。ＳＰＤは＜修正主義＞ではない，それは本当だ。

しかし又，もはや革命的でもない。ＳＰＤは「今日的な新しい理念の利益にとっても障害となってしまった。」ＳＰＤの歴史にもその原因がある，とミヘルスは分析する。非合法下でのビスマルクとの戦いに勝利したＳＰＤは「無敵」を自負していきた。しかし，それはＳＰＤを大胆にするかわりに「無気力」にしてしまった。ＳＰＤは袋小路に向かって進んでいる，というのが本論の結論である。「労働者大衆に，人間の尊厳の感情と社会主義意識――これらは使命成就に必要でる――を吹き込むのが努めなのだということを思い出す必要がある。ドイツに民主的共和国をつくるという使命のために。それは労働者の力に自由な環境を与えるだろう。そこでは，プロレタリアートの力の発展の障害となるのは唯一，大衆の無知であり，それは克服されねばならない。」

以上が「ＳＰＤの危機」論文の概要であるが，ミヘルスの政治的要求は共和制と性の平等そして民族自決であった。これはブルジョア自由主義の綱領項目に属するといえる。跛行的に発展してきた資本主義と自由民主主義の矛盾が反映している。また，主体論としては労働者大衆に対するアンヴィバレントな評価も注目しておいてよかろう。フェッラーリスの言葉を使えば，労働運動の「政治統合」（体制内化）がミヘルスのテーマとして浮上したことになる。次第にＳＰＤ内で議論の焦点をなしてきたゼネスト問題でのミヘルスの立場が問われることになる。

5）フェミニズム

ミヘルスはドイツの女性誌にイタリアにおける女性労働者の解放運動に関する報告記事を数多く書いていた。クララ・ツェトキンの“Gleichheit”には1902年から1903年にかけて比較的まとまった研究を発表している。当誌に初めて投稿したのは「イタリアにおける女性労働者保護法の戦い」（N. 25）と題するものであった。このテーマでの報告は他でも触れていた。ここでは「産業における女性と子供の保護」のために尽力したアンナ・クリショフが紹介されている。さらにＰＳＩの特徴としてプ

ロレタリアートのみならずインテリと女性の社会主義支持者が増えていることが指摘される。啓蒙によってこの立法が早まると楽観していたことが注目される。さらに，この保護法に対して，ＰＳＩ内に衛生的，道徳的，経済的，政治的と様々の動機からのアプローチがなされたことをあげている。そして青年ミヘルスは，母親が過重労働から子供の生存そのものを危殆に瀕せしめていること，さらに，そのために女性労働者が道徳的にも鈍磨し「高尚な努力や高貴な喜びへの感受性」を失っていくことに直接の怒りを表している。労働者は「労働する獣」へと堕落していくのだ，と。

全く同一のタイトル（冠詞のみが違う）で“Die Frau”に書かれたレポート（N. 18）も存在するので，先ずこれに若干触れておこう。これはN. 25との比較でいうと，運動の歴史を素描したものである。イタリアでの「社会改良の仕事」はやっと始まったばかりである。最初の保護立法への取り組みがなされたのは，1899年のボローニャ大会であった。ＰＳＩ内に「経済生活への国家介入」に反対する傾向があったという。ブルジョア政府による反動的介入だからであろう。

ここでも彼女アンナ・クリショフについての詳しい紹介がなされ，ルイーズ・ミシェル，エレノア・マルクス，クララ・ツェトキンそしてマリア・カブリーニと並んで「国際的社会主義」がもたらした「注目すべき現象」として評価されている。クリショフは女性が自分の力によって状況改善ができるとの信念を広めるのに貢献した。1900年のローマ大会で承認された「トゥラーティ＝クリショフ法案」と，同じ年に政府の提出した案とが比較される。対象（15才か10才か），大工場のみか全女性か，夜間労働，労働時間、休憩、出産休暇について政府案は全く前近代的と酷評される。

さてこの運動への支持者にはブルジョア・インテリや医者，ダヌンツィオらの芸術家も見出せたが，逆に，これに反対する社会主義者も存在したことが指摘されている。かれらのモットーは「女は家庭へ」であっ

た。といって家父長制ではなく，「資本による女性の法外な搾取」を防止するためといわれた。もちろん問題のすり替えであり，ミヘルスはそれを「センチメンタル」と一蹴している。深刻なのは社会主義者のジーナ・ロンブローゾの反論である。この保護立法により雇い主が女性の雇用を差し控えることが懸念された。その結果ジーナは「過労と飢えのどちらが身体と衛生により悪いか」と窮極の選択を迫った。ミヘルスはこれをブルジョア的見地と批判している。

ともあれ1902年，議会で折衷的な法案が採択された。彼は本レポートを「近代の政治的自由という樹木から，常に社会的な果実が実ってきている。私の信ずるところでは，よってイタリアは，間違いでなければ，社会改良の仕事の苦しい時代を待っているのであり，それは必ず，昔からどこでも，あらゆる種類の法外な力の下に呻吟してきたあの人類の範疇，すなわち若い女性，妻そして母にとってこそ良い結果になるといえる」と結んでいる。

同じ年，「イタリアの女性運動」（N. 26）では，その特徴が紹介されている。翌年1903年の論文「イタリアにおける女性プロレタリア運動史の回顧」（N. 34）と並んで貴重な文章である。

(1)先ず「イタリア人女性の伝統的特徴」が指摘される。彼はここで，イタリア人とイタリア女性の「自然さ」を肯定的に述べている。ドイツ人のような「身分的と性的虚栄心」がみられず，「ドイツ人より自然で素朴」である。（ここで，ドイツ人のブルジョアジーの心的特徴として，「外面性」を指摘した先の論文を想起できよう。）従って男尊女卑も見られず，イタリア人フェミニストに「男性への敵意」は無い。これは「当然，国の風土と歴史の産物」なのだが，これにはイタリアの女性運動に「独特の刻印」を押すことになる。

イタリア人（女性）の「自然的性向」命題はこの時期における青年ミヘルスの思想の特徴的言いまわしである。か弱い女性像は「この自然的性向」の抑圧の帰結とされる。(28)

(2)ブルジョアジーの女性運動は社会主義女性運動と「峻別」される。これは他の国と異なる。そして，それが「教会主義と慣習」で統制されている限り，政府も寛容であった。従ってミヘルスによれば，イタリアではドイツのような「目的意識ある強いブルジョアジーの女性運動は誕生しなかった。」ただ他国と同様，このブルジョアジーの女性運動が社会主義に浸透される側面も見られる。ブルジョア女性の活動の場所，「学校，衛生，選挙権，婚姻の権利改善，反軍国主義」では，プロレタリアートと出会うし国際的社会主義の影響も受けるからである。

(3)前項で取り上げたのがいわゆる「上流階級」の女性運動としたら，ここで区別して紹介されるのは，プチ・ブルジョアの女性運動である。それが社会主義に強く浸透された「本来の女性運動」とされる。

ここでミヘルスが注目するのが女性の大学教育の問題である。これは他国に先駆けて早くも1871年に解決済みである。教育職など女性の社会進出も進んでいる。「進歩主義的人生観」を持つ女性も輩出される。このグループは二つに分かれる。ブルジョア女性としての要求が満たされ，現状に満足するグループと，全女性の平等を追求するグループである。後者は次に述べるプロレタリアート女性と接近し，「国民教育，衛生，平和問題」など新たな分野へと進出していく，という。

(4)ここでは，「イタリアにおける女性の平和運動と軍国主義との戦い」の問題を取り上げる。イタリアの平和運動の特徴は，「反軍国主義」と相互に入り交じっている点にある。というのもドイツでは戦争廃止よりも常備軍を人民軍 Volksheer で取り替える戦いが追求されているからである。このイタリアの平和反戦反軍国主義運動には当然ながら，ブルジョアジーの平和団体も参加している。が，中心的担い手はプロレタリア女性である。このイタリアの平和運動をミヘルスは称揚している。というのも，ドイツの平和団体などと違って，1895年のエチオピア侵略を停戦に持ち込むうえで，大きな役割を果たしたというのである。

ともわれ，青年ミヘルスのイタリアのプロレタリア女性とその運動に

対する高い評価は一貫している。

同じ Gleichheit に続けて，5回にわたって今度はイタリアの女性プロレタリア運動史の概括を行っている。(N. 34) 前回が運動の構造的特性分析とするなら，これは，歴史的な発展段階の分析といえよう。いうまでもなく，プロレタリア女性の運動は言葉自体からも分かるように，社会主義とフェミニズムの双方の契機を含んでいる。言い換えれば，社会主義運動内部の矛盾の表れとしてのフェミニズムという視点が措定できるのであり，当然ながらミヘルスの視点にもそれらが含まれている。この矛盾は女性の経済的解放と政治的解放の関係という問題を意味する。

さてこの歴史を扱う論文は既述したように5回にわたって分載されたのだが，それは①「1893年までのイタリアの女性プロレタリア運動の始まり」，②「1891年までのイタリアの種々の社会主義運動における女性の選挙権問題の展開」，③「アンナマリア・モッツォーニ，アンナ・クリショフ。イタリア女性労働運動の最初の大きな賃金闘争」，④「1895年—98年における女性労働者運動の拡大と深化」，⑤「「最悪の年」1898年」である。

先ず，統一国家イタリアの誕生（1861年）前に女性プロレタリアートの「原理」を初めて提起したラウラ・ソレッラ・マンテガッツァ（ミラノ，1873年没）が紹介される。社会主義者が一人もいない時代に彼女は「社会問題を人道的基盤の上で解決しようとした。」この時代の運動の矛盾はこう説明される。「「民族的」と「社会的」という，その実践的応用では残念ながら対立するものと特徴づけられる概念は，今日と同様に当時も合致しなかった。」即ち，民族国家形成と社会問題——階級と性——の矛盾である。彼女は当初1840年代，「革命的愛国主義者」として頭角を現し，60年代に女性労働運動の分野に活躍の場を見出していった。それは同時に，彼女がナショナリストから社会主義者へと発展していく過程でもある。マンテガッツァがどちらかといえば実践家とするなら，もう一人のアンナマリーア・モッツォーニは理論家といえよう。彼女はイタ

リア最初の女権論者であり，統一した労働者政党の創設にも参加した。

この統一社会党はいくつかのグループが統合してできたのだが，そのひつとは例の労働者の子連盟であり，それはその綱領に「女性の完全な解放のために戦う」と謳っていた。ミヘルスはこの党と綱領に非常に興味を抱いていたのだが，それはこれが純プロレタリアートの党を志向していたということ，そして女性解放への理解を示していたからである。女性の解放無くしては，「真の教養も真の平等も不可能」である。また，綱領は「最良の経済的と知的向上」そして「常備軍の廃止」を唱えていた。

しかし，この連盟の主張は新しい社会党の綱領には入れられなかった。そもそも国家統一前から70－80年代にかけて社会主義者はフェミニズムに理解を示そうとはしなかった。だからこそ，モッツォーニの存在は重大だとミヘルスは評価している。また，60－70年代は，イタリアの社会主義運動はバクーニンの影響のもと一揆と論争にあけくれていたと指摘される。モッツォーニは，女性が自分の鎖にたいして立ち向かい，惨めな状態を打破し，選挙権の重い責任を担おうとしていることに，社会主義者同志が理解を示さないことに憤慨していた。ミヘルスは彼女に同情共感する。

さてこのように悪条件下で始まったイタリアの女性プロレタリア解放運動だが，ミヘルスが次いでとりあげたのは選挙権獲得闘争の問題である。この社会主義グループ内での女性の選挙権問題は今までとりあげられなかったとミヘルスは告白している。女性の法的政治的解放については当然ブルジョアジーや保守的の立場からの要求項目にも含まれていた。

社会主義者グループとして最初にこれを主張したのは1880年ミラノで発刊された月刊誌 Rivista Internazionale del Socialista であった。ミヘルスによればこの問題でもアナーキズムが災いした。参政権というかたちであれ，ブルジョア国家への参加は原則の軟化と受け取られていたからである。

統一社会党の結成に際しこの女性の「公的，政治的解放は無視された」

と言われる。というのも，1886年を境にイタリア社会主義が理想主義と非妥協主義から現実主義と功利主義へ，非実際的な誤りからあまりに実際的な誤りへと転変したからである。

こういうなかで登場したのが，徹頭徹尾プロレタリアの思想家，ロシア生まれのアンナ・クリショフであった。彼女は前二者に次ぐ，「第三の女性」であり，前二者を統合し，1880年代中頃に「イタリアでの女性運動と社会主義運動を密接に結合することに成功」したと評価される。当時の社会主義グループで支配的だったマッツィーニの影響を受けた小ブルジョア的な社会主義とは全く別の社会主義観をイタリアにもたらした。それは大衆を扇動して蜂起させようとするバクーニン的一揆主義をも否定した。クリショフは「社会主義者は民衆とともにあり，民衆のためにある」と主張した。

その民衆は，そしてイタリアの女性プロレタリアートは「鈍重で，忍従に甘んじたままであった。」農民は「中世のまどろみ」の中におり，とくに女性農民は「深く眠っている」のが実情であった。又，男性労働者にとって女性は依然として，「政治的には障害物，経済的には競争者」以外の何者でもなかった。しかし90年代に入り苦悩する労働者が次第に目覚め始めたとされる。従って女性労働運動も始まった。それは1893・94年のシチリアでの農民闘争によって開始され，その波は北イタリアにも押し寄せた。知識人の支持者も増える。（デ・アミーチスの Herzens-sozialismus）二つの事件がイタリア女性運動の「精神的強化」に寄与した。1891年のベーベル『婦人論』のイタリア語訳出版と，1895年ボローニャ大会でイタリア社会党が女性の政治的同権を正式に承認し，それが翌年ロンドンでのインター大会で採択されたこと，がそれである。

こうしてＰＳＩもフェミニズムに親しむようになり，綱領に「政治と家庭での男女同権」を掲げるようになる。それにクリショフの活動がおおいに寄与したことは言うまでもない。彼女はミラノの Camera del Lavoro（労働評議会）に女性部をつくり，97年には女性選挙権を主張し

た。彼女について忘れてならないことは先述したように，賃金闘争と並んで国による女性と子供の保護を重視したことである。93年のインター・ツューリヒ大会でも女性保護法について語っている。

もう一人，エミーリア・マラビーニ（-97）は男性社会主義者の自己欺瞞を激しく非難した。おしゃべりだけの男性社会主義者は対女性，対妻では「いい加減」である。彼らは会議では社会主義を弁護するが，「日常生活ではそれと戦う」，と。

1898年は大争議と大弾圧，指導者の逮捕，「90年代の最大の騒乱」の年であったが，社会主義的女性運動は着々と発展していった。そして，99年「疑い無く社会主義学問の中心地」ミラノでトゥラーティとクリショフにより “La Critica Sociale” が発刊された。これにより，マルクスの立場に立った「イタリア社会主義の理論的基礎」が築かれたとミヘルスは評価している。ＳＰＤと共通の「礎石」が置かれたことになる。

98年闘争でのクリショフのスローガンは，1) 8時間労働制，2)同一労働同一賃金，3)女性賃金の自己決定権，4)前後２ヶ月の産休，であった。

この98年の闘争でクリショフも逮捕され，20年禁固刑を言い渡されたのだが，ドイツのクララ・ツェトキンはこれを怒って，「確信にみち，犠牲をいとわない強い闘士」クリショフのために “Gleichheit” に一文を書いた。

ミヘルスはこの大争議に若干批判的な評価を下している。ただの乱暴狼藉で「社会革命」はできないと知るほどに，「社会主義理念」には熟知してはいなかった。「無理強い」するのは「子供」のやることであり，「階級意識ある成人」のやることではない，と。「真の社会主義」は「理論と実践を統一させることで，社会主義革命を無思慮なバリケード反乱とよく区別せねばならない。」

しかし一方，この「野蛮」な大弾圧の背後にミヘルスは，社会主義の成長に対する体制側の「嫉妬と恐怖」をみている。プロレタリアートのみならずブルジョアジーとその知識人も「社会主義世界観」の影響を受

け始めていたからである。

産業化は女性労働をも「歯車」(N. 92) の一つとして導入する。(男性労働者も同じであるが。) ミヘルスは，この過程は一方で「女工」を生み出すとともに，他方で「新しい婦人」としての職業婦人をも生み出すとして，女性労働者の「高いタイプ」への成長を期待している。それには女性労働者の「知的解放」が必要である。即ち，彼女らが「高尚な問題への感覚を持たず，自分の仕事と賃金について考えること無しに」孤立した生活に甘んじている限り，彼女は「最も初期の生活段階にある人間」でしかないとミヘルスは評する。同じ労働者が闘っている時に，「他人の苦しみを自分の苦しみとし，他人の喜びを共に感じ」，「連帯」できる時，彼女は「新しい人間タイプへの芽」を持つことになる。これはある種の「組織」，「社会的，政治的，労働組合的，人民的で教育的な複合的な存在」である「労働評議会」Camera del Lavoro の中で発展する，としてイタリアの女性労働者の啓蒙と人間的成長をはかる評議会の重要な役割を指摘している。

Camera del Lavoro[29] はフランスの「労働紹介所」Bourse du Traveil をモデルとしており，1891-92年にかけてイタリア各地に叢生した。ミヘルスによれば，それは「イタリアのプロレタリアートの生活においておきな役割を果たしている。」

ミヘルスがここで，評議会をフランスの労働紹介所とではなく，ドイツの労働者会館と比較していることは示唆的であろう。というのもこの労働紹介所こそフランスの革命的サンディカリズムが成長した舞台だったからである。

ともあれこの独伊比較は両国の資本主義経済発展の差異を反映している。

ミヘルスが評議会に注目する経済的機能以外の第二の事由は，その啓蒙啓発機能である。この組織はメンバーの「道徳的，知的向上」をはかることを目的とする。労働者は階級闘争で連帯することで「人格的な同

志愛」を育む。そして，労働者に「自分にも価値があるという感情」と「希望」と「活力」を与える，とミヘルスは評価する。

さらに，「人民大学コース」を設け労働者の教育にも貢献した。

さてこの組織にイタリア人女性労働者は大量に参加し始めたのは，98年の大反動後とされる。イタリア女性は「犠牲的精神」と勇気に富むが，キリスト教が邪魔していた。文盲率も男性より10ポイント高い。(35.7%)

ともあれ評議会には「知的なプロレタリアートの新しい倫理」が生まれつつあり，「新しい婦人」が誕生しつつある。

女性の解放は，労働者としての解放とともに家族での解放を伴っているというのがミヘルスの考えだが，「離婚」の自由も重要な項目の一つである。(N. 42)

イタリアの近代化についてミヘルスの評価は概ね高い。「イタリアのブルジョア革命は全体としては，文芸では輝かしいが政治的には見るも哀れで中途半端なドイツのブルジョア運動と比べると，はるかによく封建制を処理してしまった。」憲法も「はるかに急進的」である。集会結社の自由や死刑の廃止については，ドイツはイタリアの足元にも及ばない。イタリアの社会党は既に多くのコムーネを獲得してさえいる。

女性労働者の組織化という点では，「世界で唯一のもの」とミヘルスは賞賛している。女性の大学進学，そして大学教授への就職でもイタリアはドイツよりも進んでいる。

この楽観的評価にはジョリッティ時代が反映しているように思える。

だがイタリアは「離婚法」では全く立ち後れている。スペインやポルトガル並みである，と。ミヘルスよれば，これは本来「モラルの要求」，つまりブルジョアの要求である。ところがイタリアでは，「社会主義の要求」項目をなす。「資本主義モラル」とヴァチカンがこれに反対しているからである。社会主義者がこれを問題としたことにより，はじめてこの問題が「政治的意味」をもったことになる。ミヘルスは「人間性の全分野」で社会主義者は近代化を推し進めると見ている。(30)

『青年ミヘルスとサンディカリズム（1904年）』

ジョリッティは，「社会立法」に彼なりに熱心であり，イタリアの社会主義者からも好意的に受け入れられた。といって，イタリアにおける労働者階級の状態がドイツのよりましというわけではないし，そのために，イタリアでは外国への移民が多い。要するに，イタリアでは「民主主義の精神」が旺盛なのに，ブルジョア支配階級は一切の民主的努力を放棄している。ミヘルスは「無為の中の安定」(N. 84)，これがジョリッティ体制の特徴としている。所詮、政府は「支配階級によって選ばれた委員会」でしかない。それを全国民の意見の表現機関とするためには，大衆の啓蒙が必要である。それは社会主義の使命となる。教会が最大の障害をなす。

さて，この年のフェミニズム関係でミヘルスが理論的考察を行った文献は「フェミニズムと社会主義」(N. 123) である。

ミヘルスは先ず，「女性運動ないしフェミニズムは要求実現のために，無条件に社会主義を必要とし，一体となるべき」という命題は，ベーベルによって「主張され証明された」と確認する。そしてミヘルスは加える。「フェミニズムが社会主義を必要とするだけではなく，同様に、社会主義もフェミニズムを必要とする。」社会主義の観点からみて，女性の解放は「正義の理念」と「実践」の両面で必然的要求である。全人類の半分が「生存権」から排除されていることは認められない。選挙権、教育，徴兵制は、男性と同様女性の関心事でもある。しばしば唱えられる女性の身体的劣勢などは「どうでもよい」問題と一蹴する。

フェミニズム思想の先駆者としてミヘルスはフーリエとサンシモン派をとりげている。彼らは19世紀フェミニズムの創始者と呼ばれるが，[31] とりわけ前者が興味深い。というのもフーリエにとって恋愛感情と性的欲求は労働願望とならんで，人間存在の中心的原理（「情念」）とされているからである。しかも，この情念が疎外されているのが「家族」であり，従って、家族の解体がかれの要求となった。[31] ミヘルス自身は，資本主義社会でのモノガミーには基本的には否定的であった。[32]

ともあれ，女性の社会的（家族）と倫理的自由にとって，経済的解放とフェミニズムとは補完的とされる。社会主義は経済的解放と社会的解放を伴うとして，後者の独自性に気がついていたように思える。ただ，前者つまり経済的解放に家庭での自由、倫理的自由が自動的に従うとしたのは楽観的過ぎよう。

フェラーリスは，青年ミヘルスがここでベーベルと並んでフーリエとサン・シモンを取り上げたことから，ミヘルスは「当時党内で支配的な位置から逸脱しつつある」ことが分かると分析している。ＳＰＤ主流派の見方では，「女性の問題は社会問題全体」に含まれうるので，その独自性は否定される。従って，「女性の解放はプロレタリアートの解放に全く含まれる。それに内在的なため，女性の運動の自立性は認めたがらない」傾向が支配的だったからである。

6）帝国主義

青年ミヘルスはインター・アムステルダム大会を前にして「労働者階級の国際主義」(N. 106) を “Ethische Kultur” に発表した。それは民族主義と国際主義の理論的関係を明らかにし，両者が排斥し合うものではないことを主張しようとした。

新カント派のパウル・ナトルプの新著『カントの思想』(1904) から銘辞がとられていた。「真の国際主義は本来真のナショナリズムとは衝突しない。それは，各メンバーが自己の個性と権利を主張できないようなものは真の家族ではないのと同じである。しかし，個々の成員の侮蔑と思い上がりによってのみ認めさせることが出来ると信じているような家族は，真の家族ではないだろう。」

同じ事を，社会主義の領域でも主張しようというわけである。先ず、社会主義者を「祖国無き者」とする非難を「概念の混乱」のせいと反批判する。というのも「国際主義は祖国喪失を意味しない」からである，とナトルプの言葉を繰り返す。「人は祖国を非常に愛しながら，同時に強

く国際主義的たりうる。郷土愛は，人類への愛を排除しない。……誠実な愛国者はその祖国愛によって，他民族にもその能力と，それにもまして，その人間性だけにでも払べき敬意を払うようになるはずだ。」そして社会主義についても同断というわけである。「この意味で，近代の労働運動もナショナルであると同時に，国際主義なのである。」

さて以上は理想の議論であること，それはミヘルスも認めている。「文化、人生観，性格，生活スタイル」の違い，そして「言語と人種」などの「自然的相違」の存在を社会主義は否定しない。「科学」としての社会主義はそれらを「人為的」に末梢することもない，とミヘルスは述べる。さらに進んで，ミヘルスによれば社会主義はこの民族の「相違」が「憎悪と戦争」とに直結するとも認めない。民族自決権を肯定する。よって，「世界のゲルマン化」のようなことにミヘルスは「嫌悪」を隠さない。では「憎悪と戦争」の原因とは何か。ミヘルスは資本主義時代の「物質的獲得と社会的名誉」を目指す「競争」にそれを求めている。帝国主義である。（もっともこの言葉はここではまだ使っていない。）といっても宿命論ではない。ミヘルスは繰り返し，平和がユートピアではないと断言する。中世都市間戦争が終焉したように，すくなくともヨーロッパ大陸では歴史の「進歩」と共に戦争は無くなるだろうと楽観する。その一つの契機が社会主義的国際主義である。というのもミヘルスによれば，社会主義的国際主義は，ただ「人類の理想」であるだけではなく，「国民経済的洞察」でもあるからと主張する。資本の国際主義（帝国主義）にはプロレタリアートの社会主義的国際主義でしか対抗できない。よって，世界の労働者の連帯は「政治的必然性」でもある，と。一国社会主義は「生存不可能」である。

帝国主義については、ミヘルスはこの年英帝国主義にかんする一文を書いている。(N. 61) 確かにミヘルスがアングロサクソン諸国を論じた論文は少ない。民主主義の発展では欠かせない国であるにも拘わらず、そうである。その意味で本稿は貴重な論文である。のみならず，ユニーク

でもある。

第一に英帝国主義の「文化的価値」をテーマにしていることが上げられよう。第二に,「凋落」前の英帝国主義を他の国に比べて好意的に評価している点である。それは英資本主義とブルジョアジーの発展成長に対するマルクスの姿勢を彷彿とさせる。

凋落のきっかけをつくったのは，英国の本格的帝国主義戦争であるボーア戦争であった。

ともあれ，イギリスは大陸諸国の鏡として経済的社会的繁栄と「偉大な道徳的価値」を享受してきた。世界を征服するだけではなく「文化」をも植民地にもたらした。外交的にはフランス人とともに被抑圧者の解放者として,「民主的な民族自決原則の擁護者」として振る舞った。ギリシャ，ハンガリー、イタリア，ポーランドがその例である。

ロシアやドイツに比べるとイギリスの植民政策は,「絶対的な正義感」と「実務能力」の点で優れていると評価する。ミヘルスはグラッドストーンを年頭においている。グラッドストーンのイギリスは自由主義と民主主義を謳歌できたとする。「国民精神の自由な発展」,「人民の権利の行使」,「結社，集会，出版の自由」，外見的「君主制」等，更にイギリスは反文化の粋たる「軍国主義」を免れてきたとされる。ミヘルスは，イギリスの貴族とピューリタンのブルジョアジーが軍国主義に反対している，と述べている。

しかしグラッドストーンの時代に既に，産業主義と競争でイギリスは他国に追いつかれる。イギリス帝国主義の発生原因としてミヘルスは競争と貿易圏拡大とならんでイギリスの「階級問題」をあげている。(所謂チェンバレン時代の社会帝国主義である。) つまり，産業主義の不十分な恩恵配分によるプロレタリアートの不満を逸らすための海外侵略である。「労働者の階級意識」をショービニズムへと逸らすためには「大英帝国」の一語で十分であった。それは「大衆の意識を麻痺させる睡眠薬」の役を果たした。国内の民主主義は「擬似的」に変質する。古い「理想」は

脇へと追いやられ，思想は「野蛮化」する。かっては「合理的な進歩と偉大な理想――奴隷解放，民族自決の思想――」に仕えたイギリス人は，今では戦争へと邁進している。戦争は「圧倒的な大衆の低次元な衝動」を解放する。ミヘルスは当時，イタリアの新聞特派員としてロンドンにいたオリンド・マラゴーディの言葉を引用している。「国内での政治的、経済的オリガーキーは，他国に対して帝国主義になる。」[33] 社会立法は後退し，反動的労働立法がなされる。「労使の合法的戦いでの国家の中立性」は放棄される。

さて問題は，何故こうなったのかである。この「古い自由主義のイギリスの帝国主義的堕落」に反対する「階級と党」は存在しないのか。その可能性を唯一担える「最新で最強の契機であるプロレタリアート」はどうか。ミヘルスはイギリスのプロレタリアートは，労働組合と協同組合では創造的だが，ブルガリアとセルビアと比べてさえ政治的には「未熟な子供」でしかないというカウツキーの厳しい判定を引用している。これが第一の理由である。彼らは自分達の「比較的ましな暮らし」のため，「国際的な階級連帯」へは冷淡である。他国のプロレタリアートより自国の「国民的誇り」に囚われている。「要するに，イギリスのプロレタリアートは擬似愛国的で軍国主義的なスローガンの罠に全く容易にとらえられている。」

第二の原因は，「イギリスの労働者のインポテンツ」，その非政治的で改良主義的な方法にある。（正式に労働党が結成されるのは1906年である。）イギリスのプロレタリアートには「政治的役割の自覚」が欠けている。この見解はベルンシュタインとは反対のものだと自ら断っている。しかし，ミヘルスによれば結局、イギリスの文化的道徳的再建を主導できるのはプロレタリアートのみである。彼らこそ「自国内での公正な状態の創出からイギリスが外国で狂気じみた帝国主義を行なうことで失った価値を再びイギリスに与えるに違いない」と結んでいる。では，プロレタリアートの再教育に何が必要か，これが次の問題である。

ところでジョレスのＳＰＤ批判は，各国の社会主義運動の客観的な比較の可能性という問題を提出した。この方法的考察に恐らく初めて取り組んだのだが，N. 105 論文「世界の社会党の選挙統計」であろう。まだ，全く初歩的で基本的な議論しかなされていないが，若干紹介しておこう。社会主義運動の強さは何を基準に決めることができるのか。ミヘルスは票数と議席数のみでは、不十分とする。そもそも選挙権の違いが存在する。イタリアでは文盲（31%）は不適格となる。デンマークでは30才から。オーストリア，スペインでの選挙干渉はひどい。これらを一応度外視するとしても，選挙統計は即運動の強さを意味しない，ということになる。

選挙権の相違に加え，国民心理と党の戦略戦術の違いも重要である。戦略戦術では，二つの「心理的ファクター」が作動するという。最終目標への非妥協性と対ブルジョア政党の心理である。自己満足と理念のプロパガンダへの執着で，最も危険性の大きな敵に勝利させるのか。マールブルク事件の提起したディレンマであった。

ブルジョア民主主義の成熟度が一つのめやすとなろう。フランスでは，ブルジョア左派との共闘のチャンスが大きいとミヘルスはみていた。しかし，フランスに関しては，イギリスと同様組織化が低いため，党と国会議員が明白に社会主義者か否か不明だという別の問題が生ずる。本稿でもイギリスの社会主義運動がいく度か取り上げられているが，結局、青年ミヘルスがそれをさほど高く評価していないのは，その弱さのせいであろう。といって，社会主義思想に対する「イギリスの労働者の顕著な無能ぶり」という指摘は，この国にのみ限られていないこと，それはミヘルスにも分かっていた。

ここでは，ミヘルスの社会学方法と実践的戦術の問題，そして国際主義と国毎の独自性への視点という青年ミヘルスの問題意識が渾然と提出されている。

7) 終わりにかえて

総じてこの年の青年ミヘルスにおける思想活動は独伊にフランスを加えてより国際的になっていったといえる。それは帝国主義の爆発とそれへの社会主義と労働運動の対応という新しい問題を提起することになった。革命的サンディリズムへの取り組みが始まった1904年は，青年ミヘルスおける第三のテーマ，民族主義が大きく浮上してくる年でもあった。

注

（1） Pino Ferraris, "Roberto Michels Politico (1901-1907)" in *Quaderni dell'Istituto di studi economici e sociali,* [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino], 1/1092, p. 83-85.

（2） ミヘルスの著作からの引用は，本文や注でことわらない限り，"Opere di Roberto Michels" in *Studi in Memoria di Roberto Michels,* Annali della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Serie V-vol/XV, R. Uniersità degli Studi di Perugia. p. 39-76 にあるミヘルスの文献目録の番号（と必要に応じて頁数）で本文中に略記する。1904年分は本稿末尾に掲載してある。

（3） ロベルト・ミヘルス，氏家伸一訳『ドイツ社会主義におけるサンディカリズム的底流（1903-1907)』『神戸学院法学』第23巻4号1993年10月，90頁。青年ミヘルスはこの雑誌に1904年から1907年まで計11回寄稿している。その大半はドイツ社会主義運動に関するものである。

（4） 山崎功『イタリア労働運動史』青木書店，1970年，128頁。

（5） 山崎はこの点について，「このような雑多な知識人の流入は党の階級的イデオロギー的性格をあいまいにし，右派の立場を強めるのに役立った」と否定的に評価している。同上，161頁。

（6） R. Michels, "Edomondo de Amicis", *Sozialistische Monatshefte,* Jahrg. 1908, S. 363 ff. これは，*Bedeutende Männer-Charakterologische Studien,* 1927. にもおさめられている。拙訳「ロベルト・ミヘルスの同時代人論（4）——エドモンド・デ・アミーチス」『神戸学院法学』第15巻第3号，1985年2月。

（7） P. Ferraris, "Ancora sul Michels politico attraverso le lettere di K. Kautsky", in *Quaderni dell' Istituto di studi economici e sociali,* [della Facolta di Giurisprudenza di Camerino] 4/1985.

(8)　D.コート，河合秀和訳『ヨーロッパの左翼』平凡社，1984年，123-4頁。

(9)　ＳＰＤドレスデン大会とＰＳＩボローニャ大会の趨勢と修正派の台頭については，『平民新聞』を通して当時の日本の社会主義者にも知られていた。荒畑寒村『寒村自伝』（上巻）岩波文庫，1982年，86-88頁。

(10)　R. Michels, *Storia Critica del Movimento Socialista Italiano-dagli inizi fino al 1911,* Firenze, 1926, p. 144.

(11)　*Die Entwicklung der Theorien im modernen Sozialismus Italiens.* Introduzione alla traduzione tedesca dell'opuscolo di Enrico Ferri, *Die revolutionäre Methode.* Lipsia 1908. Hilschfekd, pagg. 7-35.

(12)　*Avanguardia Socialita,* 1904年5月20日号に，カウツキーの返事とミヘルスの添え書きが発表された。

(13)　Arturo Labriola, *Riform e Rivoluzione sociale* [*La crisi pratica del Partiro Socialista*], Milano, 1904.

(14)　cf. "Introduzione" (Gian Biagio Furiozzi), *Roberto Michels-tra politico e socioologia,* a cura di G. B. Furiozzi, 1084, p. 9. なお，『底流』論文（90頁）でのミヘルス自身による示唆をも参照。

(15)　Literarische Rndschau, Arturo Labriola, Riforme e Rivolutione sociale, "Die Neue Zeit" N. 28, 1903-1904.

(16)　J.ジョル，池田清，祇園寺則夫訳『第二インター1889-1914』木鐸社，1976年，119頁。

(17)　P. Ferraris, "Ancora sul Michels politico attraverso le lettere di K. Kautsky", p. 56.

(18)　Pino Ferraris, "Roberto Michels Politico (1901-1907)", p. 58.

(19)　ibid. p. 86.

(20)　ibid. p. 98.

(21)　安世舟『ドイツ社会民主党史序説』御茶の水書房，1990年，153頁。

(22)　山崎功，上掲，177頁。

(23)　アンリ・デュビエフ編著，上村祥二・田中正人・谷川稔・藤本桂子訳『サンディカリズムの思想像』鹿砦社，1978年，37頁。

(24)　喜安朗『革命的サンディカリズム』河出書房新社，1972年，16頁。

(25)　谷川稔「サンディカリズムの思想像をめぐって」『サンディカリズムの思想像』補論，303頁。

(26)　Pino Ferraris, "Roberto Nichels Politico (1901-1907)", p. 89.

(27)　これについては，安世舟『ドイツ社会民主党史序説』も同じ見解である。

(28)　自然的性向の抑圧が反「道徳的」とする見方，（「真の道徳は自然に従

う」）は彼の婚約モラル批判に一貫している。つまり，女性の純潔要求による二つの大罪（結婚を挟んだ性愛の禁欲と過剰）がそれである。(cf. N. 42) この自然の性愛の肯定はマックス・ウェーバーの禁欲倫理の対局に位置することは，銘記に値する。

(29) 一種の労働組合の地方的連合，山崎，150頁。

(30) イタリアでの離婚法成立は結局1990年代まで待たねばならなかった。参照，馬場康雄・奥島孝康編『イタリアの社会』早稲田大学出版部，1999年，43頁。

(31) 田珠枝『女性解放思想史』筑摩書房，1983年，262頁。

(32) 彼は *I limiti della morale sessuale. Prolegomena: Indagini e pensieri.* 序文（1910）で，モノガミーについて，「国家による強制的制度としての単婚制による家族形式は拒否する」としながらも，「両性の利益」が合致する「高い道徳的目的」の可能性をそこにみていた。

(33) cf. Olindo Malagodi, *Imperialismo,* 1901, p. 62.

ミヘルス文献目録（1904年）

Ⓐ "Opere di Roberto Michels" in *Studi in Memoria di Roberto Michels,* Annali della Facolta di Giurisprudenza, vol. XLIX-1937-Seie V-vol/XV, R. Uniersità degli Studi di Perugia. p. 39-76.

80. *Zum Charakter der deutschen Bourgeosie. Eine Skizze.* (*Ein Beitrag zu der Frage, warum die deutsche Sozialdemokratie so wenig 'Bürggerliche' unter ihren Anhängern zählt.*)《Der Arme Konrad》, (Kalender für das arbeitende Volk), pagg. S. 62-64.

81. *Die Geschichte vom* 24. *Dezember und von* 1. *Mai.*《Der Arme Konrad》, pagg. 42-64.

82. *'Schulbuben'-Kritik.*《Volksstimme》, Magdeburg, 15. Jahrgang, N. 5.

83. *Das Ende vom Liede Millerand.*《Volksstimme》, Magdeburg, 15. Jahrgang, N. 8.

84. *Stabilität im Nichtstun. Ein italienische-internationales Thema.*《Volksstimme》, Magdeburg, 15. Jahrgang, N. 22.

85. *Begriffsverwirrung und Klassenhass.*《Mitteldeutsche Sonntagszeitung》, II. Jahrgang, N. 5.

86. *Eine exclusiv-proletarische Bewegung in Italien im Jahre 1883. Ein Blatt aus der italienischen Parteigeschichte.*《Dokumente des Socialismus》, Band IV, Heft 2, pagg. 64-69.

87. *Bismarck in neuer italienischer Beleuchtung.*《Volksstimme》, Frank-

furt a. M., 15. Jahrgang, N. 27.
88. *Zur Ethik des Klassenkampfes.* 《Ethische Kultur》, XII. Jahrgang, N. 3, pagg. 21-22.
89. *Ein Kamph um 'hohe Ideale'.* 《Volksstimme》, Magdeburg, 15. Jahrgang, N. 29.
90. *Antonio Labriola.* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N. 29.
91. *Wie Bilse Lieutenant wurde. Jugenderinnerungen.* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N. 38.
92. *Die italienische Frau in den Camera del Lavoro.* 《Die Frau》 11 Jg., H. 6., S. 366-373, Heft 7, pagg. 425-428.
93. *Edmond De Amicis.Der Soazialist der Ethik.* 《Ethische Kultur》, XII. Jg., pagg. 366-73, 425-428.
94. *Vor einer Entscheidung.* 《Sächsische Arbeiterzeitung》 —Organ zur Wahrnehmung der Interessen der Arbeiterklasse, 15. Jahrgang, N. 76.
95. *Der Kongress der italienschen Sozialisten* (*Bologna*). 《Sächsische Arbeiterzeitung》, 15. Jahrgang N. 82, 83, 84, 85, 86, 87. Corrisopondenza pubblicata anche nei giornali seguenti: 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang N. 84, 85, 86, 88; 《Volksstimme》, Magdeburg, 15. Jahrgang N. 85, 86, 87, 89; 《Hamburger Echo》, 18. Jahrgang, N. 85, 86, 87, 89; 《Schwäbische Tagwacht》, 24. Jahrgang, N. 84, 85, 86.
96. *Von Dresden bis Bologna.* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N. 89.
97. *Revisionismus und Partei in Italien.* 《Hamburger Echo》, 18. Jahrgang, N. 79.
98. *Revisionismus und revolutionarismus.* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N. 82.
99. *Einheit der Prtei.* 《Hamburger Echo》, 18. Jahrgang, Jg N. 88.
100. *Die neue Parteitaktik in Italien.* 《Leipziger Volkszeitung》 N. 81.
101. *Das Ergebnis von Bologna.* 《Schwäbische Tagwacht》, 24. Jahrgang, N. 89.
102. *Dopo il congresso nazionale. Le impressioni di un socialista tedesco.* 《La Squilla》, settimanale socialista, anno IV, N. 16.
103. *Dalla Germania. Il personale d'albergo in Germania.* 《Il Socialismo》, anno III, fasc. VII, pagg. 103-105.
104. *Streiflys over den internationale Socialismes Psykologi.* 《Tilskueren》,

Juli, pagg. 570-580.

105. *Zur einer internationalen Wahlstatistik der sozialistischen Parteien.* 《Die Neue Zeit》, 22 Jg., Bd. 2. N. 42., pagg. 496-503.

106. *Der Internationalismus der Arbeiterschaft.* 《Ethische Kultur》, XII. Jg., N. 15, pagg. 113-4.

107. *A proposito di socialimo illusorio.* 《Avanguardia Socialista》, anno II, N. 88.

108. *Ferdinand Lasalle.* 《Mitteldeutsche Sonntagszeitung》, II. Jahrgang, N. 35.

109. *Monarchie oder Republik?* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N. 213.

110. *Gewerkschaftlich-politische Zusammenhänge in der Arbeiterinnenbewegung Italiens.* 《Neues Frauenleben》, XVI. Jahrgang, N. 10. pagg. 3-6.

111. *A Brema.* 《*Avanti!*》, anno VIII, N. 2811.

112. *Studenten mit neuem Tugendideal.* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N. 241.

113. *Un congresso funebre.* 《Avanguardia Socialista》, anno II, (2a seie), N. 97.

114. *Zu den Neuwahlen in Italien.* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N.249.

115. *Bremer Erbschaften* (*Kritische Streiflichter*). 《Mitteldeutsche Sonntagszeitung》, II. Jahrgang, N. 43.

116. *Les dangers du parti socialite allemand.* 《Le Mouvement Socialiste》, Revue biemensuelle internationale, IIe série, VIe année, N. 144, pagg. 193-212.

117. *Jaurès' Sieg über das Bourgeois-Ministerium.* 《Arbeiter-Zeitung》, sozialdemokratisches Organ für das Rheinisch-Westphälische Industriegebiet, 13. Jahrgang, N. 294.

118. *Welche Lehren giebt uns die Reaktion in Italien?.* 《Arbeiter-Zeitung》, 13. Jahrgang, N. 302.

119. *Ein neuer Sombart.* 《Volksstimme》, Frankfurt a. M., 15. Jahrgang, N. 306.

120. *Die sozialdemokratische Frau.* 《Hillgers illustriertes Frauen-Jahrbuch》, 1904-5, pagg. 810-815.

121. *L'analisi del Reichstag germanico.* 《Riforma Sociale》, seconda serie, anno XI, vol. XIV, fasc. 3. Estratto, 15 pagg.

122. *Le incoerenze internationali del socialismo contemporaneo.* 《Riforma Sociale》, seconda serie, anno X, vol. XII, fasc. 8. Estratto, 11 pagg.

123. *Feminismus und Sozialismus.* 《Arbeiterinnenzeitung》 Sozialdemokratisches Organ für Frauen und Mädchen, 13. Jahrgang. N. 22.

124. *Die Religion ist Privatsache und Sozialdemokratie eine Religion.* 《Hessischer Landbote》, ein Kalender für das werktätige Volk, 1904, pagg. 11-15.

(B) (A)以外の論稿

La morale dei fidanzamenti. 《Il Pensiero. Rivista quindicinale》 a. II n. 14 1 agosto (1904) 205-208.

(C) 書評

(1) "Dokumente des Sozialismus" (1904)

Rafanelli, Leda: Alle madri italiane

Sergi, Giuseppe: La decadenza delle nazioni latine

(2) "Die Neue Zeit"

Arturo Labriola: Riforme e rivoluzione sociale.

(3) *"La Riforma Sociale. Rassegna di Scienze Sociale e Politiche".* vol. XIV s. II a XI 15 marzo.

Jules Mandello: Bibliographia economica universalis, Repertoire bibliographique annuele des travaux rel. aux sciences economiques et sociales, Iere annee; Travaux de l'annee 1902, redige par Erwin Szabo (Bruxelles, Institut International de Bibliographie, 1903; Editore per l'Italia: Ed. Bocca Torino)